



関町小通信

平成29年9月1日
練馬区立関町小学校
学校だより 9月号

本校校庭のサクラの木の上で野鳥の卵が孵化し、巣立ちました

校長 福岡 勤

6月のことでした。「キャー！」「きもー！」と、校長室の前の校庭で子供たちが騒ぐ声がします。何事か？と外に出ると、校舎2階の天井の高さにまで背を伸ばしたシュロの木の樹上に巣があったのでしょ、6月には珍しい強風に木が揺すられて、鳥の巣から卵が落ちていました。かわいそうなことに、落下の衝撃で複数の卵が割れ、中にはもう一週間ほどで孵るのではないかと思われる羽毛に被われない目を閉じたピンク色のひなが横たわっていました。孵化直前の卵の中の様子を見たことがない子供たちにとっては、びっくりした出来事でした。

7月に入ると、「ハトをつつついている鳥がいる！」「かわいそう！」「あっちへいけ！」と通称忍者森(学校南側のアスレチックがある場所)のところに子供たちが集まっています。中には、追っ払おうとサクラの樹上にある巣に向かって石を投げつける子供まで現れました。知らないうちに鳥が営巣(えいそう)していたようで、ひな鳥が大きく育っていました。親鳥を含めると4羽います。どうもこの鳥はくちばしの形から判断すると猛禽類の鳥のようで、しばらくの間、忍者森近くに棲んでおりました。かなり高い枝に留まっているため、種類ははっきりとしませんが、調べてみると広げた尾羽の模様や大きさや色からネズミや小鳥をえさにする「チョウゲンボウ」のようです。理科で食物連鎖について習うのは、6年ですが、「ハトや小鳥を捕まえて肉を食らう鳥は悪」というイメージが子供たちにはあるようです。

また、同時期、武蔵関駅南口の階段脇の壁には、ツバメの巣があり、懸命に親鳥が巣の中にいる幼鳥の世話をしている姿が見られました。「ピーピー」と鳴いてえさをねだる幼鳥にホバリングしながら口移しで虫などのえさを与えている姿を見るのが、私の

通勤途中の楽しみでもありました。

また、やっかいものにされているカラスの子育てが見られるのもこの初夏の時季です。研究者によると、カラスの子供の生存率はあまり高くないそうで、カラスの母さんも自分のこと以上に、髪(羽)を振り乱して子育てに必死なのだそうです。

ここで27年の5月号に紹介した「啐啄同時」の話の一部再掲させていただきます。鳥のひなが、まさに卵の殻を破って孵るとき、卵の殻を内側からコツコツ...とつつくことを「啐」といい、親鳥が殻の外からつつくことを「啄」と言うそうです。この「啐」と「啄」は、同時に行わねばなりません。早すぎても、遅すぎても雛はうまく孵らず、尊い命がこの世に誕生しないばかりか、親鳥が雛の柔らかい体をつつついて殺してしまうため、好機は一瞬でしかありません。このことを「啐啄同時」と言います。人の親子であっても同じです。子供が自分の殻を破って外に出ようとするタイミングをしっかりと親がキャッチして、この好機を見逃さずに、外から支援することが大切です。この「啐啄同時」は、親子で相談しながら行うものではありません。従って、子供の自発・自立の心と、親の指南や指導が一致したときに高い効果を生むことを表わす言葉とも捉えることができます。

保護者の皆様、日々大きく成長している子供の変化、見逃さずにお守りください。

お知らせ

7/24(月)から、かたくり学級担任の
林 美都子主任教諭が産休に入りました。

その産休代替教員として春谷 花(かすやはな)教諭を任用しました。どうぞよろしくお願いたします。